

## ガラテヤ人への手紙1章1-10節 「人間によらない福音」パート①

### 1A 神による使徒職 1-10

1B 父なる神とキリストの恵み 1-5

2B ほかの福音 6-10

### 2A イエス・キリストの啓示 11-24

1B パウロの宣べ伝えた福音 11-12

2B ユダヤ教に進んだ者への恵み 13-17

3B 使徒たちに会わなかった訪問 18-23

## 本文

ガラテヤ人への手紙1章を見ていきます。私たちは、コリント人への手紙で、彼らの教会の中に、偽使徒たちが入って来ていたことを学びました。使徒たちが福音宣教の働きをしている時からすでに、異端を忍び込ませる偽教師たちがいたのですが、その大きな教えの一つが、ユダヤ主義と呼ばれるものです。

イエス・キリストの福音を信じることによって、救われて、神の国に入ることができるというのが、使徒たちが伝えていた使信です。けれども、キリストは、ユダヤ人が求めていたイスラエルのメシアです。この方にあって救われるのはユダヤ人たちであって、イスラエルが神の国に回復することが、ユダヤ人たちの間で信じられていましたし、確かにそう聖書には書かれています。けれども、それだけではありませんでした。異邦人も神の憐れみを受けて、イスラエルの神に立ち返るという約束も同じように書かれています。それが、イエス・キリストにあって実現しました。キリストにあって、ユダヤ人でなくとも救われて、神の国を相続することができるのです。

このことが、啓示によって使徒たちに与えられていました。ペテロが、その代表的な人物ですが、天からの敷物の幻が三度、現れて、啓示を受けました。そして百人隊長コルネリウスの家族が、みことばを聞いて信じていくうちに、聖霊のバプテスマを受けたのです。こうやって、異邦人信仰によって清めてくださることを知ったのです。確かに、イエス様が地上の生涯を歩まれた時に、十二弟子は共にいて、そのうちの十一人が主の復活を目撃したのですが、啓示によって、異邦人を救う神のご計画を悟りました。

ところが、エルサレムにいるユダヤ人たちの多くが、ユダヤ人の中での救い主という考えから離れることができませんでした。そして、モーセによって与えられた律法を守り行うことを、とても大事にしていました。ですから、律法とは関係なく、自分たちのメシアを異邦人が信じて、同じように救われるということは、到底、受け入れがたい真理だったのです。熱心な人々ほど、そうでした。けれ

ども、ペテロなどは、御霊によって、その奥義の啓示を受けたので分かっていたのです。

そのような中で、異邦人が異邦人のままで、信仰によってのみ救われるということに承服できない者たちが、勝手に、異邦人の多くいる教会にいて、異邦人も割礼を受け、モーセの律法を守ることによって、つまりユダヤ教徒に改宗することによって救われると教え始めたのです。それで、ユダヤ主義と呼ばれます。異邦人もユダヤ化しなければ救われないとする教えです。イエスを信じるだけでは足りず、それに加えて割礼を受け、律法を守らないといけないとしました。使徒の働き 15 章に、アンティオキアの教会にそのように教える者たちがエルサレムから来たので、パウロとバルナバと激しい論争になり、それでエルサレムで決着を付けたことが書き記されています。

このような、ユダヤ主義者らが、あるいは割礼派とも呼ばれますが、パウロの建て上げた諸教会の中に入り込んで行ったのです。教会は、福音をまだ知らない人々に宣べ伝えるべく建てられているのですが、彼らは、すでにキリストを信じる者たちのところに行って、自分たちのために改宗者を集めようとします。未信者の人たちにイエス様を知ってもらおうとすることよりも、キリスト者たちがまだ真理を知っておらず、その人たちが真理を知ることができるようにと情熱を傾けている人たちがいたら、そういった人々には気をつけてください！キリスト者を、自分の信念の中に引き込もうとしているだけです。まず、ユダヤ主義者は、パウロが使徒であることを疑わせませす。そして、彼の宣べ伝えている福音だけでは救われないのだ。福音には、これだけの深い意味があるのだ、などと、おそらくは言っていたのでしょう。それで、これまで救われていたと思っていた人たちが、動揺しました。割礼が大事であり、それで初めて契約の民になることができる。そして律法も守ることによって、神の国に入ることができるのだとしたのです。

それで、パウロは非常に怒っています。著しく警戒しています。論難しています。これから読んでいく手紙は、挨拶もほんの少ししかなく、彼らの教会についての神への感謝もなく、いきなり「驚いています」という言葉から始めています。日本人には、喧嘩両成敗という考えが根付いていて、このように妥協しないで、激しく戦うこと自体がよくないこと、みんな仲良くしようよと持っていこうとします。それがいかに間違っているかを教えましょう。もし、パウロが頑固にも、恵みの福音のために戦わなかったら、これらユダヤ主義に対峙しなかったら、異邦人に対する神の救いの戸は開かれなかったのです！彼が福音の真理のために、一歩も譲らずに戦ったからこそ、私たち日本人も日本人のままで、ユダヤ教徒になることなく、イエス・キリストを信じる信仰のみで救われているのです。パウロのおかげで、ユダヤ教の一派に終わり、一過性の運動で終わっていたことでしょう。ところが、福音が、世界中の全ての人々に救いをもたらす神の恵みへと広がりました。これだけの重大なことだったので！

癌が発見された時に、対処療法で症状が和らぐようにするのを選択するか、それとも、すぐにその細胞を取り除くことのできる技術のある医師が、すばやくメスを入れるのか、どちらがよいでしょ

うか？後者ですね。パウロは、このことをガラテヤ人への手紙で行っています。

ところで、「ガラテヤ人への手紙」ということですが、ガラテヤというのは、町の名前ではなく、地域の名前です。今のトルコの中央北部に当ります。元々は、紀元前三世紀に、ガリア人あるいはケルト人という人々が、古代ローマのイタリア北部に侵入してきました。そのガリア人の一部は、小アジアに移住してきました。彼らのことを、ガラテヤ人と呼ぶようになります。その地域は、ローマ帝国においては、ガラテヤ州と呼ばれていました。パウロは、第一宣教旅行から第三次宣教旅行に至るまで、その町々で福音を伝えています。バルナバと共に、ピシディアのアンティオキア、次に、イコニオン、そしてリステラ、そしてデルベへと向かいましたね。そこがガラテヤ地方の南の部分に当ります。彼らの間で、著しい御霊の働きがあり、それで多くの異邦人が信じていきました。その後、どのくらい経ったのか分かりませんが、見事に彼らがユダヤ主義者によって惑わされ、律法に拘り始めたのです。

### 1A 神による使徒職 1-10

#### 1B 父なる神とキリストの恵み 1-5

<sup>1</sup> 人々から出たのではなく、人間を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によって、使徒とされたパウロと、<sup>2</sup> 私とともにいるすべての兄弟たちから、ガラテヤの諸教会へ。

手紙の送り主と宛先を書いている文で、パウロが他の手紙にもある書き出しです。けれども、初っ端から、ちょっと異様な雰囲気醸し出しています。自分が、「イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によって」使徒になったということは、他の手紙にも見られますが、「人々から出たのではなく、人間を通してでもなく」と、初めから牽制しています。使徒になったのは、人々によるものではないのだ。また、人間を通してではないのだ、ということです。主イエス・キリストと、父なる神から出ているのだと強調しています。

私たちが、どうして新約聖書をこのようにして、神のことばとして受け入れているのでしょうか？その福音を神からのものとして受け入れているのでしょうか？それは、それを伝えている使徒たち自身が、神から、またキリストから直接、啓示を受けているからです。人が作り出した話ではないのです。また、人間を通して与えられているのでもありません。一般の書籍の中では、キリスト教は、イエスがいた時から、その話が弟子たちの間でふくらましていって、神話化していったという見方があります。イエスがよみがえったであるとか、この方が神であるのに人となられたとか、それは、人から人へ言い伝えられている中で、ふくれていった話、神話なのだということです。パウロは、それを真っ向から否定しています。

ユダヤ主義者らは、私たちはエルサレムから来たのだ。そこで使徒たちの教えがあつて、それに

従えば、あなたがたは割礼を受けて、律法を守らなければいけない、という言い方をしていました。人々から出ている、人間を通してということ的前提で、自分たちの正統性を強調していたのです。けれども、それが間違いであることを、パウロは示しているのだと思います。事実、使徒たちは、申し合わせて同じことを語っていたのではなく、ペテロも啓示を受けて、パウロも啓示を受けて、それぞれが同じ啓示で一致していたのです。

イエスご自身が、神殿の敷地で、「あなたは何の權威によって、このことをしているのか？」と問い詰められましたね。イエス様は、「バプテスマのヨハネは、天からか、人からか。」と逆に問い詰めて、彼らに答えないようにさせました。なぜなら、天からのものを受け入れない頑なさがあったこと。もう一つは、人々のことを気にしていたこと。ヨハネが人からだと言ったら、預言者と民は認めていたので、石打ちにでもされるのではないかと恐れたこと。この姿勢が間違っているのです。ヨハネは、自分からではなく天からのものを受け取っていて、それでイスラエルの民が大勢、バプテスマを受けていました。そして、本当に自分たちが天からのものを大事にしているのであれば、人々の反応など気にしてはいけません。イエス様が、ユダヤ人指導者にこう言われました。「ヨハ 5:43-44 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。44 互いの間では榮譽を受けても、唯一の神からの榮譽を求めないあなたがたが、どうして信じることができるでしょうか。」このような態度が、ユダヤ主義者らにはあったのです。

キリスト教会の中にも、人々から出ているもの、人間を通してのものを強調する傾向があります。コリントの教会でもありましたが、誰からバプテスマを受けたのか？ということが重要になったりしますね。パウロは、それで自分自身がバプテスマをほとんど授けていなかったのは良かったということまで言っています。

もちろん、人々から、主の受けたものを伝え聞いていくということはとても大切です。私たちがしていることは、まさに使徒たちの教えを伝え聞いて、それを守っているのですから。そうではなく、本質的には、直接、神によって、御霊によって与えられ、召しを受けて、キリスト者がキリスト者となっているのです。「ヨハ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」人を介在せず、ただ神によって生まれます。

<sup>3</sup> 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

他の手紙にも見られる、挨拶です。恵みと平安ですが、恵み、カリスはギリシア人の挨拶言葉です。平安、ヘブル語ではシャロームですが、ユダヤ人の挨拶です。どちらの挨拶言葉も入れること

によって、キリストにあって、ギリシア人もユダヤ人も一つなのだとはい表しています。

それから、この順番が大切ですね。神とキリストからの恵みがあるから、平安があります。自分が受けるに値しない神の好意を受けられているのが、恵みです。神のご性質によって、神が私たちを愛しているのです。私たちが何かあるからという原因は全く関係ありません。だから、平安でいられます。自分のしていることが完全であるか、正しいことかを気にしていたら、平安はないからです。恵みがあって、平安です。この基本、根本からガラテヤ人が離れようとしていたので、パウロは非常に深刻に対処しているのです。

<sup>4</sup> キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自身を与えてくださいました。私たちの父である神のみこころにしたがったのです。<sup>5</sup> この神に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

今、あいさつで父なる神と主イエス・キリストを言及したので、パウロは、キリストのお働きを語るを得なくなったのでしょう。それは、「私たちの罪のためにご自身を与えてくださいました」ということです。2章20節でも、このことを繰り返しています。「私を愛し、私のためにご自身を与えてくださった、神の御子」と言っています。イエス様は、私たちの罪のために、ご自身を献げて十字架の上で死なれました。自分の持っているものの一部を献げたわけではありません。ご自身そのもの、そのいのちをお献げになりました。

先日、ある「証し」と呼ばれるものを読みました。そこには、ある教会に行って、その人たちが、心を尽くして神を愛している。私もそのようになりたい、と思い、信じたという文章がありました。私はちょっと、疑問に思いました。それは、救われたことの証しなのか？神を愛する人間になるから、だから信じるという、何かもっといい人間になれるから信じようというような、自分の肉を良くして行こうとする動機が働いているのではないかと感じました。私は、宣教師の人たちからこう言われていたのです。「クリスチャンになったら、良い人間になると思わないでください。もっと罪深いことが分かります。」この深さに私は驚いたのです。パウロはテモテ第一1章で、自分は罪人のかしらであると述べています。救いは、このような罪の自覚と、それにも拘らず愛しておられる神に対する応答から始まります。

そして、罪のためにご自身を与えてくださったのは、「今の悪の時代から私たちを救い出すため」です。罪の中に生きているのは、悪魔の支配する世に生きているからです。罪の支配から解放するために、キリストが来てくださいました。十字架につけられ、よみがえられたことによって、悪魔の力を無力化されたのです。私たちは罪赦され、罪赦されただけでなく、罪を犯さないといけないという罪の力、支配からも解放されました。罪を犯さなくてもよい自由が与えられました。

そして、今の悪い時代は、キリストが戻って来られることによって裁かれます。平日の学びで黙示録を見ていますが、世の終わりに神が、世の不正や不義に対して裁きを下さす幻があります。その、神の怒りが降る世から救い出して下さるといことです。これは、教会が天にまで引き上げられることによって救われます。ちょうど、ロトがソドムから出て行った後に、神が天から火を降らせてソドムを焼き尽くしたように、教会を今の悪い世から救い出して、それから世を裁かれます。

## 2B ほかの福音 6-10

<sup>6</sup>私は驚いています。あなたがたが、キリストの恵みによって自分たちを召してくださった方から、このように急に離れて、ほかの福音に移って行くことに。

パウロは、普通、教会のことについて、神の感謝の祈りを献げています。手紙の中でそうした感謝を書いています。ところが、それはすべて省略、というか、書けない状態です。「驚いています」という言葉、ショックです、という言葉から始めているのです。今まで、キリストの恵みによって神の召されていて、その福音を心に抱いていたのに、他のものに、すぐに、急に移ってしまいました。私も言われたことがあります、これまでまともに信仰生活を送っていたように見える人から、「聖書がすべて神のことばだと限らないと思っている人たちもいますよね。」と言われました。つまり、自分自身は、聖書が必ずしも神のことばではないと言っていたのです。

私は、このような、自分の好みや選択で、いろいろ変えられる姿に違和感を抱きました。召されている、ということは、自分で選んだわけではないのです。自分で選んだのであれば、自分でそれをやめる選択もあります。けれども、主が選んでくださいました。それは、自分がしもべで、この方が主人であることを示しています。自分はすべてを明け渡すのであり、この方の言われることに従うのです。いや、神が圧倒的な憐れみで、自分を拾い上げてくださったという恵みに対する感動があれば、あまりにも恐れ多くなり、自らすべてを明け渡していくはずです。

<sup>7</sup>ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたを動揺させて、キリストの福音を変えてしまおうとする者たちがいるだけです。

こども、午前礼拝で詳しく説明しました。キリストの恵みが福音の中身です。神がキリストにあって行われたことを信頼して、それで救われるのです。しかし、イエス・キリストへの信頼だけでは足りないのです、少し付け足せばよいという考えがあれば、付け足したのではなく、すべてを台無しにします。イエスのなされた御業が、完璧に造られた料理だとすると、そこに自分の行いというちよつとした調味料を入れようとしたら、すべてが台無しになるのと同じです。同じ「福音」という言葉を使っていますが、中身が全く別物になります。

ここで、「あなたがたを動揺させて」と言っています。私が、信じて間もない時に、異端の教会に



一か月ほど通ってしまったことを、お分かちしたことがあったと思います。そこで、こんなことを教えられました。「神の主権と人間の責任は、割合としてそれぞれ何%なのか？」みなさん、どう思われますか？そこでこう言われたのです、「神の主権は95%、人の責任は5%」驚きました。まずもって、そうやって割合で数値化できるようなものでは、全くないですね！巧妙に、神の主権だけでないだろう、人間の責任もあるのだから、と、主権について人間の知性で疑問を持たせているのです。神の主権は、100%です。そこを95%とって、人間が5%努力しなければいけないというところで、神の恵みの救いに、人間の行いを加えようとしているのです。それで結果、どうなるのか？人間が100%努力しないと、神の国に入れないという呪いに変わるのです。それが、カルトと呼ばれているところが、信者たちに巧妙にしかけてくる罠です。このようにして、人々が恵みの内に平安でいるのに、偽教師たちは動揺させて、信じている内容を変質させようとしています。

<sup>8</sup> しかし、私たちであれ天の御使いであれ、もし私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音に反することを、福音として宣べ伝えるなら、そのような者はのろわれるべきです。

パウロの断罪の言葉、「のろわれるべき」とは、アナテマという言葉です。イメージとしては、旧約聖書の「聖絶」という言葉と同じです。聖なる神によって滅ぼされるべきもの、ということです。エリコを陥落させた時に、そこにあるものはすべて聖絶されているから、そこから分捕り物を取ってはならないと主は命じておられました。その聖絶が、アナテマと同じです。つまり、はっきりと、地獄に行って滅ぼされよ、という意味です。相当強い言葉です。パウロは、なぜこれほど深刻なことなのかを、ガラテヤ書の中でじっくりと説明していきます。

ここで大事なのは、「**私たちであれ**」と初めに、自分たち使徒たちのことを含めていることです。パウロが、自分が攻撃されているから、呪われよと言ったのではありません。自分が否定されているから問題なのではなく、その語っている福音が、神から直接来たものだからです。真理だから、もし自分たちも、福音に反することを語っているのであれば、全く同じように呪われたいといけません。そして、御使いについても同じです。聖書を見れば、御使いには、大きな権威と力が与えられています。御使いが来れば、その人のことを主と呼ぶほどのものでありました。それだけ、神に近い、神に仕えている存在です。けれども、そのような御使いが、もし自分のところに来て、「イエスを信じるだけでは不十分です。救われるためには、もっとしなければいけないことがある。」とするのであれば、それでも、呪われていると断罪します。要は、使徒たちにしろ、御使いにしろ、それ自体には権威はない。福音というのは、神から与えられた啓示であって、真理なのだということです。人間の権威になびいてはいけない、ということです。

<sup>9</sup> 私たちが以前にも言ったように、今もう一度、私は言います。もしだれかが、あなたがたが受けた福音に反する福音をあなたがたに宣べ伝えているなら、そのような者はのろわれるべきです。

パウロたちは、以前にもこの警告を発していたようですね。その警鐘を聞き入れていなかったようです。なので、この毒がかなり入り込んでいるようで、深刻度はかなりなものがあります。

そして、パウロは、「あなたがたが受けた福音に反する福音」と言っています。使徒たちの手紙、パウロによるもの、ペテロによるもの、ヨハネによるものなどがありますが、すべてに共通しているのが、「初めに受けたことを最後までしっかりと保つ」ということです。例えば、ユダヤ主義とは異なる、ギリシア系の異端ですが、グノーシス主義の異端が教会に入っていることに対して、使徒ヨハネは、第一の手紙でこう言っています。「Ⅰヨハ 2:7 愛する者たち。私があなたがたに書いているのは、新しい命令ではなく、あなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。」初めから持っていたということを強調しています。使徒たちが信者たちを励ます時に、「今、持っているものをしっかりと持っていなさい。」という言葉が多いのです。

なぜならば、サタンは、また偽教師たちは、主にある確信、心にある確信を攻めてくるからです。あなたは、それだけではだめなのだ、と責めてきます。神の恵みによる福音、神中心の福音なのに、自分自身に不足があるとして、自分を何とか良くしなさいと煽るのです。人中心の福音にしようとしているのです。そうやって、いつも自分を責める、自虐的にさせようと責めてきます。これが、いかにも美しいこと、高貴なこととして装います。このことに注意しないとイケないのです。福音は、自分のことではない。神とキリストのことであり、その恵みのことなのだ！と、毅然として立ち向かってください。

<sup>10</sup> 今、私は人々に取り入ろうとしているのでしょうか。神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、人々を喜ばせようと努めているのでしょうか。もし今なお人々を喜ばせようとしているのなら、私はキリストのしもべではありません。

ここが偽教師たちと、パウロたち、真正な使徒たちとの違いです。人々に取り入っているのが、偽教師たち、ユダヤ主義者らです。そして神に取り入ろうとしているのが、使徒たちです。なぜ、彼らがそんなに割礼と律法を勧めているのか？その動機を、パウロは手紙の最後でこう書いています。「6:12-13 肉において外見を良くしたい者たちが、ただ、キリストの十字架のゆえに自分たちが迫害されないようにと、あなたがたに割礼を強いています。13 割礼を受けている者たちは、自分自身では律法を守っていないのに、あなたがたの肉を誇るために、あなたがたに割礼を受けさせたいのです。」

キリストの十字架は、人々につまずきをもたらします。ユダヤ人にとっては、特にそうです。自分たちを解放するメシアとして来られて、異邦人の支配と従属から解放し、回復したイスラエルを中心にする神の国が建てられると信じています。だから、当時のローマの支配のくびきから解放して



くれると思っていました。ところが、反逆者の処刑である十字架刑にかけられたのですから。しかし、それよりもっと深い部分で、解放が必要でした。

それが、罪からの解放です。私たち人間はとかく、被害者意識を強くします。自分はローマに虐げられていると思って、自分を正義の立場につけます。けれども、イエス様は、あなたがたはではどうなのか？と問われるのです。バプテスマのヨハネは、悔い改めるために、下着が二枚あるならば、全くない人に一枚分け与えなさいと言いました。二枚しかない、この貧しい状況を何とかしてほしいと願うじゃないですか。ところが、でも、二枚持っているという恵みがあるのです。その二枚の中で、神に命じられていること、貧しい人に施すということ、心の刷新が必要なのです。私たちは、どうしても周りの環境が悪いのだということにしていまいます。けれども、キリストの十字架は、私たちに死をもたらします。自分自身には何も良いものがないのだという意味での死です。その中で、神に憐れみを請い、神の愛に信頼するのです。

ところが、そこまでの内なる人の刷新は、肉の誇りを取り除くものです。プライドが許しません。それで十字架のことばに、多くの人がつまづきます。それで、迫害も起こります。キリストの十字架を信じて受け入れることは、自分自身を否定することだ、自分の今までの在り方、生き方、人生の誇りをすべて否定することではないか！となるのです。

しかし、「いやいや、割礼を受けて、律法を守ってユダヤ教徒になることによって、救われるのですから。」と言っておけば、焦点は十字架でなくなるのです。ユダヤ人になったという肉の誇りがあるので、人々の迫害はやむのです。「とても、いい教えですね。」という人間的なものになるのです。例えば、「日本人には、元々、すばらしい恵みがある。実は、古代神道にユダヤ人から受け継がれてきた儀式がある。神はこうやって愛しておられるのだ。」として、神社参拝も、神への礼拝だとすれば、クリスチャンになる人が増えるでしょう、という考えは、まさにこれと同じ発想です。人々から良く思われたい、人々を喜ばせたいという動機が働いているのです。

キリストの恵みを受け入れることを、どうしてこうも離れてしまうのか？それは、言い換えると、肉の誇りがあるからでしょう。恵みを受け入れるのは、自分には何も良いものがないと認めないと、恵みではありませんから。自分のほうに何か良いものがある、だから神によって救われるのだとすれば、神ではなく、自分を誇れます。けれども、恵みの中では、何も誇るものがない、ただ神に栄光が行くだけです。しかし、その神への栄光こそが、私たちに真の喜びと、平安をもたらすものです。